

49 通訳基礎トレーニングにおけるクリティカル・リスニングの重要性とその指導

学院手話通訳学科 市田泰弘 木村晴美 宮澤典子 野口岳史

手話通訳に限らず、あらゆる言語通訳者の資質として「他者の話を理解する能力（以下、聞く力）」がきわめて重要であることは論を待たない。手話通訳学科に入学する学生の学力の低下が問題になる中で、「聞く力」の向上はもっとも重要な課題のひとつである。しかしながら「聞く力」の研究は「話す力」のそれに比べて遅れており、その指導は暗中模索の状況にある。当学科では「聞く力の向上のためのドリル集」を開発中であり、実際の指導の中で試行と検証を繰り返している。その中から二つの事例を取り上げて、聞く力をめぐる問題の一端を示したい。

課題①「特定海域」ではまず概略以下のような内容の説明を口頭で行う。「(1)海には「公海／領海」の区別があるが「海はみんなのもの」というのが大原則である。(2)国際海峡では、海峡が沿岸国の領海に包摂されていても国際海洋法条約で「通過通航権」が認められている。(3)この通過通航権により、すべての国のあらゆる艦船は船種、積荷の如何に関わらず、沿岸国への事前通告なしに国際海峡を通過できる。(4)日本は国際海洋法条約で認められた領海 12 海里を国内の 5 つの国際海峡（津軽海峡もそのひとつ）には適用せず、「特定海域」と位置づけて領海を 3 海里とし海峡中央部に公海部分を残している。(5)それは日本が非核三原則を掲げているからであるといわれている」。この説明の言外の結論とは「国際海峡を核兵器を搭載した外国の軍艦が通過することは拒めないで、そのことで日本に核が持ち込まれたことにならないようにしている」ということである。しかし、この説明の後に「津軽海峡を核兵器を搭載した外国の軍艦は通過できるか？」とたずねると、学生の半数程度が「通過できない」と誤答する。

課題②「これからがこれまでを決める」では、寺院の門前に掲げられたこの標語を示し、この標語に感じる違和感と解釈を解説させる。この標語に違和感を感じるのは「因果関係と前後関係が一見逆転しているように見える（「これまでがこれからを決める」ならば違和感がない）」からであり、標語の妥当な解釈は「これからの選択しで、これまでの価値は変わりうる」であるが、やはり学生の半数程度が、「「これまでがこれからを決める」と同義である」と解釈したり、「「これまでがこれからを決める」ならわかるが、この標語は解釈不能だ」と答える。

課題①に正答できない者に、聞き手としての通訳利用者に言外の結論を共有させるような通訳ができるとは思えないし、課題②に正答できない者はそもそも当該の標語を正確に聴き取ることさえできない可能性がある。通訳者の資質という観点からは看過できない結果である。

ここに見られるのは、「他者の話によって自分の思い込みを修正できるような聞き方」ができていないということであり、いわゆる「クリティカル・リスニング・スキル」の不在である。そこで必要となるのは、「クリティカル・リスニング・スキルはどのようなスキル群によって構成されているのか」という理論的な考察と、「そのようなスキル群はどのようなトレーニングによって向上するのか」という実践的な取り組みである。当学科では、これからも試行と検証を重ねながら、理論的な考察を深めつつトレーニング内容の改善を図っていくつもりである。